續膝栗毛

二十

120
43
53

国立国会図書館　タイトル『道中膝栗毛 8編続12編』 請求記号 120-53

ガラス使用

岐蘇 續膝栗毛初編 下

120
43
53

東京圖書館
和書門 小說類 二六函 一二架 九一號 四三冊
120 53

国立国会図書館　タイトル『道中膝栗毛 8編続12編』 請求記号 120-53

ガラス使用

金毘羅参詣続膝栗毛初編下之巻

十返舎一九著

讃岐国丸亀の名ハ諸國にきこえて。爰も貴舩入津なれバ。繁昌殊にいふべくもあらねバ町家ハ濱辺にそひて建つゞき。旅籠屋なども多く。いづれも家居きらびやかなり。弥次郎兵衛北八も舩宿の案内にまかせて。大物屋といふにはいり。女どもは出向ひ

「コレハようお出なさんした。サアおあがりなさんせ

TOKIO LIBRARY FOUNDED BY MOMBUSHO 東京書籍館 明治五年創立 文部省

明治十年交換

弥次「アイおせわになりやした ト 上へあがる。このうちハせんどうの宅なれバ至ておやらしきが

女房「アノ子や そのかたがたの ゑりうり 弥次「ぎやうてんどのめぐらんしろがアノ子や そのかた

の大あるぜナア。御天(ごてん)まがつさぶやあるナア「サアきのふ(昨日)せんだ

なりせうとおもひおつさるいな。それよまずや。乗合(のりあひ)の

人が船中(せんちう)で死(し)なさつてナア。おとなしいおかたでござん

でおつさるいなア。コレおきさるすや。お客(きやく)さんも気(き)の毒(どく)な

小ぼうさまノウ、中ちやんよい。おぢでよ飯(めし)こしらへてあげさんせ。

せんどうの女房「小盃食 「サアお客さん早(はや)くおくへお出(いで)なさんせ ト 打つれておくへ

つれゆく 弥次「コレきた八。さんざんくつくしいしんどうさんざ

ぜ 北八「めしもまだまださ 女「ヱイ湯(ゆ)よおはいりなさんせ

弥次「弥次さんいつ続くか 北八「イヤおれ先(さき)へいかう 弥次「女中

風呂場(ふろば)ハどこぞの 女「あちらの縁をついてナア。まつすぐと

お出(いで)なさんせ ト このうちきた八ハゆにはいりにゆく せんどうの女のあとをついて 北八「モシおめへさんはそこ

てへまがあるかい。おそまつなことじやが。ここの女中(ちよちう)ハなんぞ

女「あれハ子や。ここのおかみさんじやわいなア 北八「ナニおかみさんだ。

コリヤたまらねへ。おめへさんが 女房 女「アリヤナ おいでどし

まいな さくてもぐらへんなのあさりかなん。下女の主をおかまひとなりければ 弥次「女ハあまさところ はまさ
あんまり早御なるのぶろ。おめへさ動きつ種がびがあん。
きいて金ろ気がぶぶ 女「ヲホヽヽ。おまいさまのこちらや
ゆのナアとふむりと 弥次「コリヤ有がてへ。ゴウ耳を出し
なアワレよいつく ト言をいく 女「ヲホヽヽ。何ちやいてかいや
トおりへはまは弥次をつめておあげてゆく。弥次ハも ふろでおふよりいろがけよ。ふろぞをのぞき 弥次「どよぶ小八来ておく
あがらねへか 小八「コレ〳〵弥次さんちよつと見ねへ。コノふろハまん
ぞろう ト 見渡せは弥次年ふろぞ〳〵としてそれば、ともやきかなめをたく かぶましふろあり。すべて京の人のふろハひらふて、ふろ桶のうら
はなくらのかまを用ゆ。そのうちはそうのかまの底かにやけはしきさる 上のあたりよりかさせて下ふ板をしく。東人阪などみぞりつ。ちかとしちるぶんと
いわのまいつきていなう 又あのまひでまし いいつてた
あんまりとかばかしく こんひらさん名の
人さく ちょよく あるところとぞ

弥次「ハヽヽ。なるほどあいつハめづらしいの 小八「かへちんな
風呂のへとりそてかるかい。ひよつと又此鍋をまち
ぬいておかるめへと外でかかつていふア。ぞんだうもせな
弥次「十二かまうとさア はなくそらつてまんのん 小八「そんなら

なんだらう。コリヤ野郎の釈くときそなる誹諧師だな
いかが生ながら土葬にされるといふもんだ弥次「イヤいめへま
しいと紙といふ。あまり出かしたト
ともよれはあたりを大きなるふろのあかれとひとしくぐつとしけさがらくる
たまりかくて弥次郎もいつしまいずしきてくるよくてそうんと臥りながらめぐるあとへ弥次郎入りくるりてまはるにあまりあなた
げんとめちりでぶかしましるらろ。
あんだのせんどうざしきくいでまちらく
北「それハ作退屈さぬじや
あろ 弥「いかけで今夜こそハ大杯に酔せかうかん待
ぎ。ヤ時に此海上覺雜はいつき称ひよ一ぜハせあらう。
女「なんぞおめへの所に肴ハありやせんか 弥次「エイ茶袋

とだぶりひんノウありおかしい子ドモぞうすりとも菜漬を
あげとめげまするよろしう子ト 北「茶袋と土瓶を菜漬する
このへんのもんぶもの。ぞんざいなのがこまるもの。
北「ぞうしてらア。とうだそのお汁ハひどくまづいがアノ
おとひせろう。三番叟の吸もので外へハおかうぢと。おれ等
吞かけハしし。何でもいくらでもやく酒を出してくんな
せく 弥「もしくその茶袋や土瓶のあとで鉄瓶をさし出す
おして。茶漉のこしらへ。銅釜のとし菜漬もあるんだが

国立国会図書館　タイトル『道中膝栗毛 8編続12編』 請求記号 120-53
ガラス使用

よろこびなせへ　せんぶう「ハイ〳〵　さきほどからまちかねてゐやした。ドレいんきよ

さまにもあげましやう。よい子ヤト　ふるへながら　女房を　キヨクルト云フ

銚子をもちて入れて、せんぶうのもちいだすおとかうもち、まちかねたとうかつなる女がつぎ「どうびんのふた大

のみやがれ。あんまりおもしろくもねへ。なみだのつきねへ　サアさらば　ナギヨリ　弥次

おあがりなさんせ「ハアどうびんとは酒の事か　土瓶の茶

とへかへら。そうだろうのとぶる　せんぶう「さよじや。サアおくみなさ

おかんせ。アレこれへおかわりにもおあがりなされ。その

どれナア。おまへかいんきよくろじや子ヤ。ハイ　いんきよ

このあとの女がうつすべき酒をもつてゐる所へきたり

弥次「おまへもあがり　ヲヤ〳〵。ハイ〳〵

サトうく。ありますまいト　いうなかにおき　のませ弥八へさし

北八「ヨツト。いつそうれしのこと。

せうことなしのありがたくのト　ひとりうけてのんでいるうち

弥次「ほんに　いうてもやめるものとあらためて

どぶろくのぶた今のその酒をのむとまちまち。むねがわるく

なりて。コリヤたまらぬト　いちめくさんはあんまりおく

北八「どふも

弥次「何ちうのさんしき「アてまいのぜのおりうなどおぶ

北八まけ「酒のつらいのじやア。なくパアきらくさ。おめへさんぴら

のまちがあくろうさ　弥次「あぜく　北八「そのよ　私でうの大あくの

ときに。好物な酒を一生のべますめへと。金毘羅さまへ
願がけしたじやアねへか〽ホンニ。さてよじやナア中々へりゆ
ナアッ室で酒をのんでじやと気。あつまれく〳〵。えらうぜん
とぶ。大吟呻べゑやくどじやなひ子や〽なるほど。そんな
すいが入つてねへをそゝ。コリヤどふしようかろふ。
あー。あいやい酒どうちて。志まゐるでわからぬ。金毘
羅さまもめんが酒紙ちうとうぴちくもかゑでもござる
めへドヤアねへか〽そんなんやて。どんぴらさまのおもちナア。
おかろしい〽ハツイハイうらの祇をまもさ人がナ。そりやいな
それで。気が居遠ふて死んでじやさいな〽でへどのこと。
コリヤどふぞしておもらびなるがいひ〽ソリヤナサ対しどゆや
さらなおくめとでへナア。どんぴらさまへ酒のうまさて
さしはかナ。忘持ノウおそおもらびなるが恨狭じやか
〽こちち待とへぴら徒らぴとん立てあるのワリヤ
大変なアろうぶ〽十二そのてへのよへ辛抱まとらか
い。どのくじんる業があつて。おめへの家のへよゐめの
国立国会図書館　タイトル『道中膝栗毛 8編続12編』 請求記号 120-53
ガラス使用

ことがあるとおいらがかんざし〽北八〽どふせうかむねが又むかつく
しくさる。びくらと死んだらはきまりがねへ。今かくしてから
緒ゝしてあるびしやびくり。ヤア ヒッ トコナ ト立あがりて何か口のうちにぶつ〳〵とさうやうのきもを
おがむ〽さう〳〵ころりはよかさんせ。夜がよござるから八ッぱ辛抱がでけ
ねへうつ。北八川までござりますよ〽北八〽そんなら八まぞ。
南無金毘羅さまく〽北八〽くゝ。おいらよく酒をのめ
るのんだっサア北八 事を盃はどうしたる〽船頭〽コリヤナもう盃が
ふとしておい。秋錠器が彼方ござってひよつくと出ていった

子ヤ。いゝ〳〵〽のつまみめつと。大きなるのんでせうろそう。
北八〽コリヤくりよくつかけんよ。酒をあかうてくれねへか。おれは
見せてなりつハ情なみ〽北八〽そとが辛抱ぢやめちつとぶんさく
いゝせへしウ船頭さん。アいらぬへ酒ぶく〽北八〽立まちのお
かげかして。少しがめちやよくなつしらぶ。又そんなハ咽喉こく
て胸がつまりい〽北八〽エヽいゞのきさはくとぞりよ〽船頭〽あゝかし。
おきのどくぢやナ。めへより あきまをよいな〽北八〽おめひが
おそろしい。ぞんなうおはれめつく ト ちよてさかづきをおさめっと女ぼうがかつてへかち

ちやうど女のとんとおもち
さきをとをもかゆら
〽モウおよりなさんせ　千代〽それがかなしく
寝つてあげさんせ　ト のこしまでひしとふつてへゆく。女ともそれ
とうまひて。それもかくかくと。弥八ハその
おかねのうける弥次郎兵衛ハちすち
あるかいつとして
弥次〽コリヤくめちやくちやと　おきて居
ねへ附合をまつて独り男ど。コレサくく　トおしてもこせと一向
よういしなく。ねる
より外はなく...のいがきあり。あがくくするとふつてのきもね　ちかづきより
やう...弥次郎兵衛か寝のうちいちやつきる女。ひやりは来り。あんどうの
仙をうつで
あかりト
女〽おまへいさ。まづおやすみなさんせ
弥次〽おめへ
のくるのをまつてゐる。コレ爰へ来な。其のしがある
女〽ヱイ
お年寄りかや。サア寝なさんせ
弥次〽おめへ寝るならば
女〽コレ

さあ寝へ。ねてもよいかいのヤト　弥次ハ女をとらへてゐる。よるはあつ
ひやりそ弥次郎
ひようきをかま
女〽其情ないことをいつてねてもおくれ
まあねへ。そんなことのちうと気短なくしなますまいがよ
あのさ　女〽何ちよいと。弥次〽ヲイ　おきなひ。おやな。コレイ
どうでもいゝね　ト　女ハ...
弥次〽其　それなら
そりやまアねへ。早く八ツどうぞいや。かへ何
女〽九ツでもあろかいな
弥次〽まだひとはごさる。コレありやせん
おいらへ気短じやらへ。ねることならねへ。おめへも　おきこ

国立国会図書館　タイトル『道中膝栗毛 8編続12編』 請求記号 120-53
ガラス使用

客人(きやく)来(き)ず。よつてなんともなしが出(で)来(き)ぬ女をつかまへい。
もしやしろでよ てナニもなしノウさまにいやゝ 弥次「コレ
それならコウ。鉄槌(かなづち)があらがあつて来(き)てかしなへ 北八「コレハ
かなさんかなづちのをもふのだ。ソレ 何(なん)ちふさんそのしやもハ 北八
「イヤあの猫枕(ねこまくら)を此様(あそこら)へうちつけて。立(たち)ながら寝(ね)る
ためのかどぢや。何(なん)ちよいとてしや 北八「コレ宝(たから)の山(やま)へ入
ながらも手をむなしくとれそのまゝふそれまはいらだろう
夕。息子(むすこ)どのまで。まうちさまがよ。立待(たちまち)としてコリヤとて

ら見ぬト あちらのほうでもまた茶をがぶがぶ吹出し 北八「ハテおかしろく。コレ
女中(ぢよちう)。あの男(をとこ)はなんでそんなにと。寝(ね)てゐるあのしらが来(き)く来ねな
ト おびをきつて小ばりとめのでとぞる 女ハとめをつぶしかねおきて 「アレはぐノウ ひねつてじや。
こちやそまがつて手ヤ。ト 一かくきんはかけ出してゆくと おかし
北八「それなら八(や)ッぷ。ぼ次さんもなも寝(ね)ても寝るんじや。ころり。 八ッのときのうねゴヲくとなる
弥次「いまくましい。きまくめんだくよ ちうさものを おしろ
くもあんとも殺く
北八「御利益(ごりやく)を茶(ちや)よせしおもひうろさまして

寐られぬ目ハさらさらおもしろく
弥次よつて笑ひを催し。そのまゝ打ふしけるが。夜も
夜あけて起出支度そのくハおみやにまゐるべしと
松原を案内にそのまゝ宿を立出けれどよ。余木田
のかといふまいる。九亀より五里半それより松が鼻といふ所へ
尼掛なりとく。十果あまりなる子供に獅子舞を
かぶせ。太鼓うちたてし。銭を乞ふものあり「サアくく。因那
さんがた。お尼ウカキひまやうよ。浅かく人せ子や。トントンチキく。

トンくトンく「ナンダ尼掛ひぞ。毎日ゑ来きらしもしんよんで
やろう
節分の夜あつあれど尼掛ひ
おめでよそれ松が鼻の那
かくてうちすぎしれば。桜井村とく。旅籠屋茶屋あるよ
おかさまる至る。途中よ大なる唐銅の鳥居あり。
是ハ東都の人その建るよし記しあり「弥次ナント爰で
チト休んでいかふ「酒屋ハごめんぞ。餅よあふうトいふ

さとうもちとゑんだん
あるうちくゑんぎ
「コウあねへ。その餅を十ヲだしてくりや　盆
ふでものせて出しそくゑる　弥「イヤ　酒もあるぜ　北「エエ
ふつき出して下さへ。その内餅ハいくつでも振舞　女「イ
おのがりなさんせト　きしかよねあさりち　どの見そうちきる　北「この内のく。サア
ゑんじめさ見て　弥「この餅ハなんざる。マア　おめへようしてしめ
みの食へ　北「そんなら一ツ喰てさえく　弥「いゝ餅くいやな
餅茶一本木とゑえる。都弘えあげやせう　弥「コレしや
申しのやく　北「ホンニおめへハ売女体の上戸であろう

上戸の茶のみあらしぎ。茶でもおもいれのむ　北「なせへ
弥「おいらもおなじめんざ。ほれさえまずあげて御くんなや
いめへの食さんハあやまる。犬ホでも出てあります。あと
れお盆硯おまがおつともりよおちよう　ト　ひとりむせうよおりこを
大坂講中月参と云ある札を　ふところの内二人の男
きたりしの茶やへ這りとまり　「コレイナ　おい酒入合だろう
おへえりひな。肴ハなにがあるぞいな　北「ヱ　いめへましい
出るが来ル「サアへいりく　弥「ハテめちうと休んでいきや
まるり　茶やのさんま「エイ　おさかなハナア。へうじゑのお汁と、あさかお　エツ

の菜付とナア。そふぞうの出きたものあるかいチヤ　大坂亭主「その
猪の汁ごろ。そうとうも。なるほどあつかんにしてかんせ　女「アイ〳〵
ト　おくへはいりてさかなをもつてくる　ほどなくつけのさら二ツだいどころと出る
大坂「アヽきよといゝ。よい酒
じや。モシ高麗も酒のよい所でござりまするさかいナア　やじ「さ
出さ　大坂「あるさかいおのみなはれ。お肴なんぞひとつ
あげましよかいな　北八「それはありがたふござります　大坂「サア
あがりなされ。酒をひとりでのむとおもしろへぬものじや
ト　北八ハさかづきをさす　北八「ヲトヽありまする〳〵。アヽいま呑ふ餅よう
ハ又格別なものじや　大坂「さア〳〵まア一ツちやのおさへあげ
なされ　弥次「それはありがたく　北八「ヲヤとんだことだ。おめへかの
まされ　弥次「ホイ三そふだつたら酒もしようちのものぐ
ござりませぬ　大坂「ハア金毘羅さまへまいりなさんすかいな。
さぞめでたく。何ぞ願がけしてじやあろがの。その願ハなんのか
さういな　弥次「わたしらはおかげで英雄を遺きせし　大坂「そしてあなたの
よいじやないかパア願さへかなふとおもろのものじや。
呑んしてもぶんない。わし罰があたろうと思がたんで命

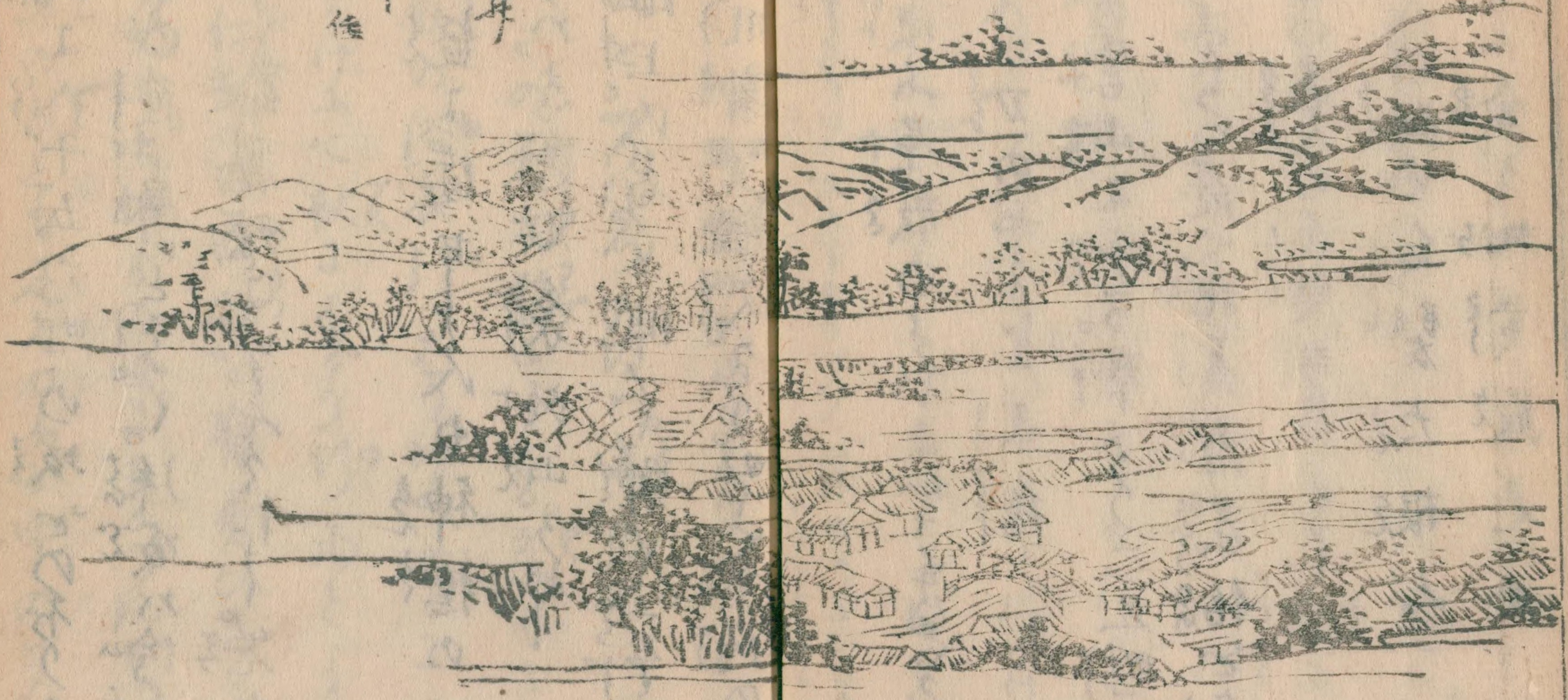
ひしろとそよふとおもやきついきハなけいこいの「その
命をとてしまふものかとんどこといふお人じやて。
酒えてゆきもものきいな。酒のかハり外はおまいの
ことなめどそくさんしらがよいこいの隠外よこなな
めのとひくべりの一物じや。これハどうもたまらぬぱゝ
時は北八いゝふじやアねへかつびんなあら出かけよふ。アイ
おせじを大いまいちをうよいうりずしさ。おさるへ来り
中にも下は此所をしうちいで五六丁もいけばらくひとの町よりいづる丸亀より
[illegible]三里[illegible]あり。

上はやまくるありていと
めづらしきたえなり
共と巨賓ふ屋形のこそやまおさまりまう
御代の刀の中なる文橋
是より権現の宮山に出る禁より二三町だらうの
ほどれ。商家よきらびえて。地黄煎茶飴を賣家多
し。ほかに阿弥陀の商人の白髪なるを見る
うしろ人の白髪大根など
ちよとさし合ろ地黄煎見世

金毘羅山麓之風景

三味線のおとも里しるある
御山下

絲がわのらくとうけて御てら乎
春秋亭仲俵



扨て仁王門に入十五六町の坂をのぼりて御本
社にいたる。その荘厳いとたかく。結構ハ檜皮葺
にしていかめしく。花麗殊にいはんかたなし。先寶前に
額突なりて。
十露盤に達せし人も神徳の
おもさをはかり難く象頭山の神
此山より海上の島々浦々郷々一望の中に
見かへりて。風景いふも更なり。やがて下向の道を

いそぐに。椿待所神馬堂のあたりより。あとなるもの先に
あゆみて。鑓道をふりかへれバ。年の頃二十二三歳と
みえ大ふさの若衆髷にしたる。色白き女男子
の旅人に。中形の浴衣引かつき。かく帯に緋縮緬
あけすけにひきかけて杖にすがりあとより。六十
ばかりの親仁が少しの荷物を脊負ひたる供にして
付てゆかぞ。弥次郎が女にちらとみえて目をくばせ
ぐ下。此道辺の方とは見えぬか。女中の此のお山へ

素読なのさゝといふハ、ぽんちんの王ぶへかいまだかよ
かゝお出での「女ハイさよや。大坂の女郎がいかい見える
なかに十二大坂の女。ソリヤアえんどこどだ。なんでも
人連「女さよじやさかいな。アリヤ毛のとてさんじや
がかへ給ぶうらえるしせい弥次。あゝい難じやさかい。
ホンニそれとの名をなうじやアのナ「北それハ道が退
届かいでもどこい。是ハ大坂ハ、お嬶りの気
なまめかしいと一所ふお出でもどよい「女ハリヤお姉ぢ

ゃ一所さんじやうあいなコレナ、ちよさん此おくさま
おさうへいきなやるいな「弥次ナニあるめのぢや。空へ青
天井じや。気つきひいものゝ「女ヨホヽ。あるのハな
をいよてじや。てまんさ「北モシおめへがけへあつとして
膝よそのうちさうい顔で。よるさかさかうばかりの道中
よく護摩の灰がはやるさかいゑ。気をつけさしやつと一所
よあいびのせんをれしても大丈夫じや「女さよかいなあ
まつらぶコレコレしどもい。気くちら谷とせよくいはしやんせ。

国立国会図書館　タイトル『道中膝栗毛 8編続12編』 請求記号 120-53
ガラス使用

いまのさんがらがどうちやへおいでなさるぞいな 弥次「それを
おまいがたもナア。席は善通寺ぐらゐ。その保谷へ参詣
宿ノウしくござんしたがこいらの子ヤ。ト申しこさまなの ことをよろしく
おしめよ。保坂から八町ぎさおとがとてをやぎしのあとより 北八「ナニサ ト
せんぞうのさきぞえうへ。多度津らいぐうへかゝりむくまちまち
ずよ女中さん。今夜アこちらが此の宿へいつしよにまよ
とまりなされへ。お茶ゝでよろしうござんすゼ 女「ソリヤまあうれしい
こちらでござんすいな 弥次「それより。おめへとおいらがいつしよに
ねるのか 女「コレしや。久しうお客と寝さしまがあるかいな。
どうなるこつておられいす。手あそび 北八「イヤおめへの亭主
もあまりでどうするもかねとおもひつゝ奇妙く
弥次「ナニおめへがきめうがるもおかしい。おいらが京へのぼつたとき
みけえのぶ 北八「そのかはりねへぞ。とおもつたがおれはまたおもつて
ゐる。ノウとろさんぱゝ。耳が延引してゐるといつへいて
うんぶ。コレおめへとんだこでも呑みなさろねへら 弥次「アイおやぢ
かぷ竈の内じや。とろとろいふぎやなとこいの 女「それじ
やのつたなどあると呑んせといつてぶやるいな 弥次「ナニ亭子

のめ。どうらよろかんの玉子があろぞい。牛房なとアり
畑はあるじやあろ。ワハヽヽヽト此うちは中や居通寺ましくらず牛がうハ中し如来四ツくへんスのれ東なく
こゝはさんぞのして門ぜんのちやをよ中でまんとまる
喜多「ようお出なさんした 亭主「ろのへぞうなく
ものがあろうね 女「ヲヽしれナ。そこにも出てあるぞいな
弥次「おめへ飯にしなせへ。コレ〳〵やしもさん。何ぞ〳〵めへ
さかなで。あの子はめし給出して呉なせへ 北八「おいらハ酒にな
しよふ 弥次「酒をあつう熱くさらめのぞ 北八「サニおめへら
うちのかん。此子やきつさんも呑なさるゞふう 女「さー
じや。とゝさんもよう〳〵も。酒をあがらいてんじやつらいが
北八「それえゝが悪い。酒はおいらが旅籠はらく。コレ〳〵酒をよ
出してくらんかいなア、 喜多「エイ〳〵ころえましたト
さけさかなもちきたる北八きやくをひとりのめしのさかなとも ちやわんをかりて のむ
女「ヲヽきさんきやの。こちらいな
ちいさいかめのじやあんまいな。コノ茶碗でおやうハナ
ト あそこなやなりのちやわんは引うけてぐつとのみ有たる 喜多「コリヤとちよとれいばらそちらは
ありましよまい。ヲトミ〳〵ア ゑいのらいの。座敷はうらに私
まちようい 女「そのおとをどちおこさんせ 喜多「なんじや。も一ツ

国立国会図書館　タイトル『道中膝栗毛 8編続12編』 請求記号 120-53
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『道中膝栗毛 8編続12編』 請求記号 120-53
ガラス使用

のめるお辞儀(ぢぎ)はせんぞト 引うけく〳〵つゞけてのめバ、ろのさんみ ちやわんをひつとられもつゞけてのむ
北八ほどなをつぶし 北八「コレ〳〵おいらがはうへもちつとなせんな おなぢ「いや
おまへがたはよいのゝ。コレ〳〵御酒(ごしゆ)のおかはりじや。ちつと
づゝめんどうじや。壱銚子(いつてう)あと二銚子なと。いくらでも
かんしてもてこんせ 北八「イヤこなさんまる酒(さけ)ぞとおもつて
大変(たいへん)なことをいふ 女「なんのやまの飯(まゝ)にせうものを。コノ
おひとバ。あんたらハめいよふでけつこいなる。モシナおひとつ〳〵で
おくれんか。そしておまへらもろくておくれいな 北八「イヤおめへ

銭(ぜに)は御かまひなしに大食(たいしよく)じやなコリヤおそれる〳〵 ト ふたりおなかふくれつぶやく
こそかしこ女ハいそ〳〵食べざわざわくと 弥次郎もおやぢもまさくのんでしまひ
「サアなんぼぞいやおまへ
弥次「のさん出(で)かけやしよう。おてしもさん勘定(かんぢやう)へ
茶屋「ヱイ〳〵六百五十文おくれなさんせ 弥次「これや
あまりハ北八まあお出(で)さんせ 北八「そんならさかなく ト ふせう〳〵
みなのところのおもひをすまして立いで。曼陀羅寺(まんだらじ)へまゐりがてら、此谷までのふもとのところまで三里あまりおもひめしを名物としてうる茶屋
あり。既(すで)にこゝやるのも七ツ時(どき)過(すぎ)る比(ころ)となりけるが、いそぎ
曼陀羅寺(まんだらじ)より。殊(こと)に険難(けんなん)の山坂(やまさか)を歴(へ)て来(きた)るなれバ

国立国会図書館　タイトル『道中膝栗毛 8編続12編』 請求記号 120-53　ガラス使用

おの〳〵足もつかれ。そのうへ小雨のふり出しけるよ。今度
津のくにへはまだ宿遠きよしをきくより。ゆきやすらはんと
上宿せんと。とある茶屋をみつけ。或茶屋のうちへはいり。
弥次「ナントもうこゝらでとまつてくんなせへ。ちつと早い
がとまつてくんねへ。ていしゆ「エイお宿ノウ。あがらしやりませ上が
りやませ。コリヤ長松子や。湯ノウもていでりやせ。サア足
ノウすゝいでとく〳〵あがらしやりませ。小八「アイこちらはお世話
サア一所にあがりやせう ト ふたり〳〵足をあらひ〳〵あがる
「コレヤまて。おまへのつれもこゝらにかへ。弥次「イヤお女
あとの茶屋で。おまちといひて。かいかいとかへりけり
いよ〳〵とんだことにねけぞ。女「そうじやて。なんぞくふ
もんはないか。弥次「コレ〳〵なにかおさかなはあらふが
あるならば何ぞ外よりものはねへか。女「ハイおさかなは
ノウ。そのお肴物でおざる。それはしやかせ。弥次「コリヤようろう
それをこしらへ出してくんな。女「エイ〳〵いんまいるぞよ。コレナ
おなさ子や。たぶをあてやませ。コレちよつとよめしびつから
長松

りてこいやいト（おやぢはさらかぎをもちてなではしめしびつ川よせめしをかくるもとふきなから）「コリヤちよつとまちよ
ぐらんその下ナア掃くべてあつたとこぜや。コレやまさ。ねこん
は何ちふ事てねずみぞい。それでもちやノウおくせへるトむきやう
（生くなべくるのを ひとりわけて中きにて）「コリヤくちやくちやよ。コノ中けさノウ盆ま
のせてちやとおくへやりていけいや。コリヤく炭團のきれの
じやろのい。モて何ちふ子や。もちどけいやいト（弥次）
（きやうのひろらびくふしめつけて中きのめしをおんまわりおくへもちはこぶ）
（小八）「是はころうサアどろのくもいやて
えんなせへ（弥次）「ヨヤなあさんぱふさくめしへかぜこんるふ
まつくろぢの「ソリヤ墨のハナア。なんじやよ。みぞろさ
こッちだろでござる（弥次）「そんならそのまッ黒へおめく
の手あらはずつてまずつまといふもののぶら。その儀へ
まあまあの（北八）「イヤ手やまぶあとふもござる。うちの
ぐさろうめがナア（手ばやのくらを川へ…）うどんノウ
ふさくめしとすまつかんて。盆よりおくしくがナア。その
炭が盆よころげんで。ふさくめしノウ。ころかなうるも
ござらのはそれともうどんノウえへしやまるとなまよ

こくりてばかりおます北「十二さじんがこれをとるものか
さんごとをいふかなあきまへ弥「イニヤそれはいふわいや
やまさかまちどもはこひありやまさでこさいますそのへべりもナ。
座頭どのゝうちりくふナア。むざしノウどざれて。
さじんノウこちらへて。あづきうけてこれをやはじ
さあい子ヤ北「ナニそれなかつく。ソリヤさじんじやア
あるめへかさかちのとこあう弥「ホニナアそのわさ
かちでござりやす。これしいなぐやそれのいでなぶるまや。
おりしろもねへかんのこんさ。北「それいらが
らんおしろ汁がぶりめしは親父のひぐりものしこで
爺婆どうかあやまる。わりへたとふりでおとみ
いゝねへよ。サアおめへがさへ口ぎ。こひなうらねへう
弥「こりやかんでもよいこひかどうさへあがりいか。いとのむ
かいふへなまひいかト　わらの帯ひきむすびなおしかえりかへりて
戯　ちすみの浜にちとかへるとゆうにはかやかましあちの
名物とこの杖でてきまげど膝とのきで

みぎりめし やしき 絹谷（きぬや）の茶屋（ちやや）

かくて日もくれしかば。夜食（やしよく）も出（いで）てそれをくひ
しまひかねて、床ばかりは大坂ものゝ女でしかけて。
遊興（ゆうけう）も肴（さかな）ちよかいなしん。なんでも年ぎやくとげん
この下紅（くちべに）をで撫（つ）でそ塗（ぬ）り、ともつえこび。ひりよくらんかて
時がよどまりしるなり。北八おまへをさとり、横（よこ）にくく
し。宿弥次郎に鼻（はな）あかせんと、それもいろくに気（き）擂（ゑ）しそ
ねよるそのうち、俄（にはか）に騒（さわ）ぎ四方山（よもやま）のものにかへる。寝（ね）

一段しづまり。座敷もせまければ、かの女と弥次（やぢ）も
次（つぎ）の間（ま）に床（とこ）をとらせ打（うち）ふしより。弥次郎、北八に
おしびてふとんに隙（すき）なく、宿（やど）寝入（ねいり）して人々の寝（ね）あざまし
るをまちかねるに、おとゝし。両人（りやうにん）やり、まかせ、ありて。その
淋（さび）しく。勝手（かつて）の方のさわぎしづまり、座（ざ）も次第（しだい）に立（たち）消（きえ）がし、
夜（よ）の更（ふく）るにしたがひ、いびきの音（おと）のみ喧（かまびす）し。弥次郎
時分（じぶん）はよしと、北八が寝（ね）いきをかんがへ、そろと起（おき）いで
次の間（ま）のかのくにとつそろくと這（は）ひよるに。有明（ありあけ）の

国立国会図書館　タイトル『道中膝栗毛 8編続12編』 請求記号 120-53
ガラス使用

ともし火(ひ)をけしければ。さながらまつくらで女の顔(かほ)は見(み)えず

さぐり足こそとてふとん引まくりはいらんとする所。

女おきかへりようめく中より弥次郎声(こゑ)をひそめて。

「コウ〳〵おめへどうぞしてか 女「ヱヽじやいな。まアきさん

何事(なにごと)じやぞいな 弥次「何をとぼけるのか。おめへの咄(はなし)が

あつて来(き)たものを。おめへも承知(しやうち)であろうじやアねへか。

女「コリヤナさうざまよかいなア。なんぞいふのがあらいか 弥次「なんと

おまへのぶ 女「アノナ 持病(ぢびやう)の疝気(せんき)があつて。おまへさんのかいな 弥次「イヤ

とるおれぞりいふ。女は疝癪(せんしやく)があつてはずかしきのつ

キツイナ。コリヤ女じやないのか 弥次「女でなくてど

うするものだ。男がどうするものぞ。併(しかし)女か男か

ドレ〳〵見(み)んとぶけてさぐりトト さぐりあたつて さうりやすべてがすきまなし あたたかとんと

ぞーつのびきのびて弥次郎いかにしても 弥次郎がびつくりして

「ヤア〳〵。コリヤ男じや。どうしよ

おめへが男ぶり。おまへさんもかわりないかいな 女「ヤア〳〵。コリヤ男じや。どうし

はどちらへでも転(ころ)がつて合点(がてん)がいかねへ 女「そりやあんまりでん

なアるほどや赤村(あかむら)鼻之助(はなのすけ)といふてなつ屋敷(やしき)の舞(ぶ)台(たい)

華邑堂

子(こ)じやないか。去年(きよねん)おらが痔(ぢ)で煩(わづら)つて十が八死(しに)かゝつたときへ、さわぎのあつちや、ないつたらあのおさんへらしひとりだよりかうして、きやさかいらんひとりさまへ、ぐずんがけしてぶやあつしうて。このお数(かず)ゆうしてぞんとよかつさかい。それでおきいすりはさんざつのじやまひなぢがお。絶(ぜつ)で思らうひく、ととひつして。又さうよう痔(ぢ)がいたふて。それは持病(ぢびやう)の癪気(しやくき)がおきたさかい。いらぶ気はおうてき、うそ、いひ。どんぞて、ようさうておきいな。

きいさやの〳〵 北「ハア それでおまへはうろたへるかいのア。ぞんざうなつてそうなつさ 婆「そうのかをいふん、せんぞとちよのはずじや。そこでおきんさいか 母「おいらアのふ おめへと女(をんな)ぶとおめひつめて。とんぶ余計(よけい)なことをいふ ホンニ此(この)癲気(てんき)のくんびがとおもふと夢(ゆめ)にもおもかんぢや。ソレそう〳〵 婆「アイ〳〵おまへもいゝそうぢやど、母(はゝ)もちとよかつた。わたいそお母(かゝ)をだいぢにすれ 北「アイ、又(また)おまかい甘(あま)い、母(はゝ)と母(はゝ)をたのむへと ゴウヤア

ねつからまつちやねへらうさト ぶつくさいひながら

あちらこちらあれこれとさがしとりて爰ねへ弥八まくらもとを

まんとうあふみなくきよくねいりけるを西もうおこし〳〵 下コレサ弥次

弥八くらつと起きあがり 弥八ナイくなんぞ 是ハあまりです

おいらがはいつてゐるか 北八よく寝る男だぜ コウぼくめへ

なんでもまちがひないか 弥八まちがへとハなんだ 弥次ひま

お見かつぎの客の女のゑへいうことを 弥八ヤアおめへ

見ていつて来やうぞ 銭金 弥次イヤ ぜにかねぢやあない

すつかり手のありがた その合羽の世太のきせけ きつととつくる

手めへもおとなしくあけさつせへよく寝入てゐたら 弥次ナニ

ありがてへのおらアあつちへおめへをおこしてねいりこみがけを

まつとしておかつてやるがイイ 寝へつて おきえ ミつくされたなせま

かけやすから 弥次まあいいから 弥八ヲツト せうちく イイヤ ますこ

おいらアおめへのよみちやねへ こつちよまで万ヱとおかなか あとから

うきのあしめ 大よろこびよ きて がくせて こうまへなあとらく

トむつくとおきあがり 弥次なんぞいろいろかへを手ぐりよつかみへ出かける

うしろからきたのおかしくはたびのはなし きやうがくもない 北

八ハうらみとさぐりにかかるのをけがらくわいなかて ときうんかへそうつと

あとからまくりけ うしろのうちへ 手をいれて ぐつと せん せん きるそふくれ

ころ。さん孝がねみさぐり。弥八もつとおどろき。きせるをつかんで。そろ〳〵
とびのきて。みぬをうかゞへば。あかりくらくなりてどちらへとんだかしれぬの
うのものやぢろ。さん孝はまたうなずき。されば。めくらとはいへ。めあきのやうにぞ
のわかりとぞ。そろ〳〵さぐりよれば。弥次のわきにきたりかゝりて
あとをつけかゝる。べくねづり「あゝく。どうだ。やまたい　ト　弥次とあきれ
つけが。弥次ざめとさけまし
ころよ。弥八とさん孝とぶつかりしかたへ
さぐり。あげんとするふとんのすそをとりて
弥次「コリヤ　まくらをさがせ〳〵
ちさ　まくらはちかひの。おそぐそうしていゝかい。どうしたやら　まくらへうごいてし
がね。せんかたなりくさつて。肴をつけて　おかつぎ。なかいゝとめがけ
あくしよふ。さぶやコリヤく　どうしてもあかりをてらしてやるかいなあ
火イともしてくれ。せいをまく　ト　よぶこゑをきゝつけて。まへにある「何じや
そうぞくじや。ふがさんさる。何とやられもせんさうん
ト　おくの方より出きたり。はけのまるめる。あかり。あんどうをさげてくる。さすれども
ずけよふとすれども。かんどのもとへとゞかれ。めあけられてやうやくとうちなる
ちあんどうは
ねをとりつけて　「ヤアく、おまへさんかな。コリヤ　どうじやいな
弥次「イヤ　あのこちらのうちがてんのいかぬ気じや。とおもひしが
ござりますぞ。人のねている所へのめりこんでかんとさうしたの
じや。コリヤ　さしおんぞく　ト　めつけのかたのわるい。ぶんぶはひふたぐらゐ
よまりのくび。ぶん文まきつけるを　「イヤ〳〵　何といふても　きゝませぬ〳〵
ヨレ　宿の気。みなあきさんせく　弥八「コレサ〳〵　まづまづきか

しそんなせへ、いつちんがどうぞかうでもなんでもよござい
やせぬ。恥をいへば埒がきらへやせんがありやうを
おめへの娘御の所へもいらぬとおもつて。ツイかどうぞへ
といふ一件さ ト 思ひのほかぞくぞくうれしさに 「ヱ、何のへ
ぞひ。こちが娘の所へとへ。コリヤ きり（？）はきだくし
まちがつてゐるのか。こちとら娘をつまみてきたぞへ
コリヤ そちのむすめじややないか 〽ゴデナウ おめへのむすめ
ど。そんな女じやアねへのでござりやアせんどうりで大まか
金玉であつたら 〽弥次「ナニいゝかげんにさらんのじやアナイ
こちが此細布のひもへ、なんでこなたの手をかけたのじや
〽弥次「こりやきんたまとおもつて 〽おやぢ「ナニ 〽北八「アノ金玉と
おもつてさ ト 耳のはたへ口よせてさゝやくぞ 〽おやぢ「ナニ前まちがへなさんな。きんたまが
あるものかいの。そのかはりかちまへたふくろのなかのじやあるまいが。あり
ちまいかんせ 〽北八「イヤむすめどの金玉ぞ。あつたまちがへ
ことおもつたのさ。それでおめへの中へ 〽おやぢ「ナニむすめ
のきんたまがまちがつて、足が中へまつるもののやく

しかもなかまをぬすんでくる。そのかはりなさいちや。ばかまんぞ

ばかまんぞ。ト　どうしたものだらふ。弥八いろいろいひなぐさめけれど、北八のきげんいつかう直らず、きよろきよろとまはりをみまはして

こぶねとひろひとりものをあげて弥次郎
あれへぞろぞろとゆきぬ

めばかしや櫃擦入ぞしてさけが

とりちがへしつれ金玉の論

北八「エヽおめへもいゝきぜんだ。おれをばとんだめにあはせた。

弥次「コレそのはなしで擦かへがいゝ。サア出かけよう。ばか仕合

ト　まさかおかしさにこらへられずどつとわらひけるにぞ、これよりはさみだれのふりけるなかをつれだちて

ゆきけるに、ほどなくむかふにみゆるは

勇士はりきみかえりしものゝゆへ、つよくつげるよ。ひやかし、ほめられ、あひさつ　たちまちふくれ、とゞまるところの
のりもの、ばかばかしいとてけさへおもしろくもなく

めいさくこそよくはなしまし
ちくしやうともちかいふたり

北八「サア　どうでも出かけべい

弥次「イヤこのまんちうとやんはなかなかてへいとおもふこと

さういふものせく　ト　とかくあいさつせずはいゝ北八ふたりのは
さきへ出かけてかの男を女とおもひちがひせし

そのさくどうろ程ヶ谷の寺の仁王門ようすぶりさへおかしく

まのうつ。おくのいん蜘蛛のいとやとひまにて十二文で出

あがる。このとうげをこちらへて
びやうぶがうらといふところ

薄墨に隠るゝ霞ひきまくて

屏風が浦の裏の景色

それより弘法大師の誕生したまふといふ。霊跡乃
御堂を拝みて。十四條精舎を見まはりて幾度
條の御廊下をいそぐ「弥次「ナント。そこらで休まうか北八
おめへ、どうしたとんだ顔つきがなさけて来た
「北八「イヤきのふから、ずいぶん虫歯がいたくてならねへ。
ひさしくおさまつてゐたがこらへられなく
いたんで来た「弥次「ソリヤこまりいの。金毘羅さまへ礼を
かけたがいい「北八「願かけとまるで、それへいはぬ「弥次「イヤさういひ

むかふは。アレあんな所に妙薬虫歯の薬といふ看板
がある。買てつけてみなさろせへ「弥次「ドレ〳〵。おれまでいかう。
買に入りける。トその見せのあるさまを見れば、いろいろてぞうさうかな
ならべたる見せの、「弥次「ハイちとお頼申ます。トこの見世のあるじ
えへ、五十あまりの大がらなる男。そこのかたへきて「どうぞ虫歯の薬を下さりませ
さ「北八「アイ虫歯の薬を下さりませ「亭主「エイ。むしばの
いろ〳〵ありますが。どなたさんむしばかい「北八「ハイこちらで
ござります。けさから、どふもいたんでなりやせぬ「亭主「ドレ

見せさんせ　小八「ハイさやうなら御めんなさいやせト　を
うけて見るに元より此めんは人の歯肉の影をうきにうるさかけがねより
まちんぐのめんをかへて白幣をとりきなど　そのまゝその口中へ手をいれ
のどうぐをとりのべてあり。あるじ挟みて「ドレ〳〵ト　どふぞと二ちらへよつて
のべるちやうちんのやうなるものをとり出し
口をあんせ　小八「ハイ〳〵アヽヱト　口をあく　あるじ「ハテ悪いくさい大きな
口ちじや。そしていつと不掃除なものちやの。歯くそ
がいけじや。これじやどうぞいやがるはづや。あろ
婆「さやうさ。此男ハとんと女房にきらはれますはヱ　あるじ「そうじや
あろそうじや。あろ。虫歯ハ下なる上歯なのの　小八「下歯
であり申て　「ナニ　下歯属陰合口則陳於上歯
於如向外挑之則易脱。とあるコレ〳〵　小八「アイタヽヽ
あるじ「コリヤ葉あんせ。あるなど一ぺんハよふなつても。おつと
見るなりまと外の歯へうつるさかい。コリヤねいてぶらのの
小八「あくへいらぬが。デアまいをやしやう　あるじ「ナニイナ。痛
かいまよぬいてもんぜまあ。婆「とてものこるふちが
あちらねくやうよ。ぬいてもらへがよかろへぜ。あるじ「さうじや
コレあんまて。新参めてどんせ　小八「ヲアノきぬそんでぬくの

くぺんぶをと口ナニいとおいよいよ。おぢよくなれ
さらい薬づつひさんなるト気ぬきをよりよせ口サア目をねがつて
又口をアヽとすんせ。アコリヤ気ちうの口中じや。なの口
臭胃火食鬱也喉腥肺火痰滞也とある。
ソリヤねくぞ口アイタゝゝ。コリヤ鼻をねぢつてどふする
さる口それハしれた。脈みして歯とおちがくてツイ鼻を
ねぢよふとしたがねいてもぶんなる鼻じや。おやまなゐ
せうひよくてあきまん鼻じやそのへの口イヤそんなみ
おめへちやうさぶどとせ無くおらのまヤヤを口もらく
いんきいくきまぬくきいの。ありしれじやいんきいぱ。あせ
むけはなしんせ。ソレ枕やなどいつてぞふじやく。ときさ
ましが療治いたゞて金毘羅の御夢想じやさらん。
アレみんなせんせ。ちんぷんさまが勧請してあるさいの。霊験ぞ
と。ありさんせ。おなさんうちもさぶめて。ちんぷん気
じや。おなさんがあとのへ南無象頭山金毘羅大権現
とやるくるが。こちの所のちんぷんへあるへよふがちがふ

国立国会図書館　タイトル『道中膝栗毛 8編続12編』 請求記号 120-53

ガラス使用

さいの〔北八〕なんとおまへさまの〔亭主〕コレがとゞのハ南
むし歯抜(はぬき)のえんぷうさまと〔北八〕イヤおまへゆゑまくらそれ
かゝる。かへいくらげんかしてなをおしあてゝやるを〔亭主〕ぬ
ゑるまいさ。そのかわりこれが療治(りやうぢ)ハちよこと入れいかたをとが
わりあるが。アノ歯ぬきのせんせいハねくぞ トいふのをかく歯ぬきをいはへるれを
あげあてまへ〔北八〕アイコレめつそふな。人の顔を足でふまへて
あげる〔亭主〕ハテそれがわからねへもんだ歯ぬきのじやが。きつとしてゐやん
せ。たゞやつたらぬくのよくてがおのかげの ト 歯ぬきさまぐつとふんばりぬく
〔北八〕アイタヽヽ。コリヤあんまりひどいめにあはせるよ。ヲイ
いたく〔亭主〕なんのよういたく。コレ〳〵わしがそのぬいた歯のあとへ塩を
いれておきさんせ。サア〳〵ちつとでもよくおなりなさんせ
〔弥次〕人をだまし〳〵。ひつぱ療治(りやうぢ)ぢやござつて。人の頭(つむり)を
土足(どそく)にかけて。なんぞめにあはせる ト ぶつ〳〵どなりたつる。このあひだにあるじはこのてんの人ども歯ぬきをまつてゐる
あらふうらどのきんえの人とえくまどこにおめくぐちよろぎをえらう〔亭主〕エイ 岩新(がんしん)さまかな〔弥次〕イヤ
それたどのぢやよりせんと〔亭主〕それはさや。そのかわり
おまへがいれてかんさまのまして歯(は)がナア。あかんで

いつそはぬけあがらいで子ヤ。どうぞなりと入歯して
くださりやませ〔弥次〕ハテぬけるもんぐんならいかや〔北〕そんじや
そんならちやまませ。これはほんぬけさん子ヤト見よあふのく
〔歯ぬき〕イヤおめへ下顎の歯も入れあくさるか〔弥次〕あごの下顎をなえたる
じや。こちらの下顎のきられじやさかいのぞ。それから の
おりひつきぜんのおもいちおふく〔北〕ずぶりさぷく
あたへあたくびまぶはおうなりてりそえ〔弥次〕おに入
いとへはふぐのまへがどん見せさんぜ。イヤアよりやいらん

まづじや。むしばへぬかいでツイそのとなりのをと
ぬいてのけさつたの〔弥次〕ナンノ。どうりでアいたく
〔歯ぬき〕ドレぬきなおしてあげまほいの〔北八〕イヤもうよしやせう。
又そのとなりの歯をぬかれちやアなりやせん〔歯ぬき〕そ
うかえさん。せばついの歯ともみなぬいてあげまほい
な。その中ほんむしがあるかしらいで。それからぬるかじや
なかいな〔北八〕此野郎はいいかげんな人をてうきまん
ぬしは虫ではかれ。むしばをぬくとつてぷあんともも

あいたとあるぜねこぞやアかうでかしこのおありましく
ろくまうやアがん　イヤこなさんハこゝらへきそうじや
のなかなど外の歯をぬいてハこちのあやまりじや
まうし。そこへ入ざしくなうらハ。さへのひらよ下卑た
歯の不用なるハこのがあらさうな。これといれてなうらん
の小八とんどをぬいしやアがる。下卑のぞがおいての
こらくのつまるものかいあくましい。ザア弥次さん
いきやしやう。他手より抜歯がいらんで来ず
いそへいて歯ハなくしていてかへらぬぞあるさ
糸切のむし歯ハぬくぞ行貫ね
舌をぬかれぬよりハましなる
かくよみてうち興じけるが。さて八ハあまり中のあ
仕出しくぱよし痛さつよけれどせんかたなく。頬を
かくへのかゝうちうくのさみそその日の未の刻ごろ
亀の宿。剣の大物屋あそこへどりつきぬ。

120
43
53

国立国会図書館　タイトル『道中膝栗毛 8編続12編』 請求記号 120-53　ガラス使用

120
43
53

国立国会図書館　タイトル『道中膝栗毛 8編続12編』 請求記号 120-53
ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『道中膝栗毛 8編続12編』 請求記号 120-53

ガラス使用